

あとがき

公益財団法人中央教育研究所
所長 三光 穰

第40回「東書教育賞」を受賞された先生方、誠にありがとうございます。心よりお祝いを申し上げます。

審査機関である中央教育研究所から、今回の応募・審査に関するご報告とご挨拶を申し上げます。

中央教育研究所は、1946年に東京大学の海後宗臣先生が中心となって設立された民間の教育研究所で、来年、設立から80年となります。設立の年に「アメリカの新教科書に関する展覧会」を開催、翌年には地域カリキュラム「川口プラン」を発表し、戦後カリキュラム運動の中心的な存在になりました。1953年には文部省所管の財団法人として認可を受け、その後も教育実践に関する調査研究を続け、2012年に、内閣府より公益財団法人としての認可を受けました。

現在、研究所では、公益目的事業として、「今日的な教育課題に関するシンポジウムの開催」事業、「教育に関する調査研究」事業、「教科書研究に対する奨励金助成」事業、そして、「東書教育賞」の論文審査および論文集の編集を行っています。研究成果をまとめて教育現場等に発信する研究報告は、1973年に第1号を発行し、本年3月には、第105号『未来を拓く道徳教育の探究②』を発行いたしました。

さて、第40回「東書教育賞」は、昨年10月21日に論文応募を締め切り、154編の応募をいただきました。昨年度は125編でしたので、第40回という節目の年に多くのご応募をいただいたことは、大変ありがたいことと受け止めております。

厳正なる第一次審査を経て、12月12日に最終審査委員会を開催し、小学校部門・中学校部門の各賞を選出していただきました。今回は第40回ということで、「特別記念賞」を設けました。「特別記念賞」を設けるのは第30回以来となりますが、今回の応募論文が受賞対象となり、かつ、過去においても応募論文が高く評価された応募者を「特別記念賞」候補として審査し、小学校・久保田智子先生、中学校・岩船尚貴先生、川上祥子先生が受賞されました。

応募総数154編の内訳は、一般部門が133編（86%）、ICT活用部門が21編（14%）となりました。学校種では、154編のうち、小学校106編、中学校45編、その他3編で、論文内容での小・中の比率は7対3となり、昨年度と比べて小学校の占める割合が大幅に増加しました。

「小中別・教科領域別応募数」の傾向を見ますと、小学校では、国語と「総合的な学習の時間」が各13編、算数が12編、学校経営・学級経営が10編と続いています。中学校では、社会が11編、理科と外国語（英語）が各5編と続きます。

論文タイトルについて際立った特徴は見いだせませんが、「個別最適」をタイトルに含む論文が5編、「自由進度学習」をタイトルに含む論文が3編ありました。また、今回初めてタイトルに「生成AI」を含む応募論文がございました。

応募の形態ですが、今回は「個人」での応募が139編、「学校・グループ」での応募が15編でした。昨年度と比較して、個人での応募が30編以上増加しています。

応募の地域についてですが、北海道から沖縄、海外の日本人学校を含むさまざまな地域からご応募いただきました。最優秀賞は、今回中学校の1編のみ、愛知県岡崎市立福岡中学校・永田祐己先生が受賞されました。20年前に創設された栄養教諭制度ですが、東書教育賞で栄養教諭の方が最優秀賞を

受賞されるのは初めてのことです。栄養教諭の配置促進が求められている中、今回の受賞は意義あることと考えております。

最後に、ご応募いただいた方の年齢層をご報告いたします。

年齢層は、20歳代が20名、30歳代が46名、40歳代が37名、50歳代が32名、60歳以上が19名でした。概ね、各世代からまんべんなくご応募いただいています。

多くの先生方に支えられ、東書教育賞が40年にわたって回を重ねることができました。誠にありがとうございます。今後も、現実に根ざし、将来を見すえたご実践が、数多く寄せられることを願っています。

以上、第40回「東書教育賞」の応募状況に関してご報告いたしました。次回、第41回の「東書教育賞」でも、多くの先生方のご応募をお待ちしております。